



日本人のための世界史入門

小谷野敦著

新潮社 2013 (新潮新書)

文学部教授 板坂 則子

本がお金で買われる商品となり誰でもが手にできるようなったのは日本では江戸期以降のことですが、それでも昭和の中頃くらいまでは、本はまだ貴重で高級な品というイメージを持っていました。家の中にはガラスが前面に入った大きく立派な本箱が置かれ、百科事典とか名作全集のような大部のシリーズ物が収められていて、来客たちの目に触れるよう誇らしげな位置を占めていたものです。そしてその時代、「教養」というものは自らを磨くために重要なアイテムだったのです。でも現在、読書のほとんどは娯楽を目的としており、目先の利益には役立たない知識を、自分を高めるために身に付けようという読書は、本当に少なくなりました。そこで深い知識を伝えるための本の需要も減り続けています。たとえば歴史知識もその中の例外ではありません。本書はこのような傾向の中で、かなり変わった特徴を持つ本です。

著者の小谷野敦氏は、その記憶力が半端ではありません。時にサイボーグかと思えるほどに詳細な記憶をさまざまな分野に保ち続けています。その上、資料の探査に時間を惜しみません。そのく

せ、あとがきでは「歴史の知識は、だいたいいいのである」などと本書の内容とまっこうから対立することを平気で書いています。取り上げられているのは古代ギリシャのトロイ戦争から第二次世界大戦後の世界情勢まで、古今東西のあれもこれも、しかもその出来事に因む小説や映画、派生した言葉まで、種々雑多な「知識」を溢れるように詰め込まれています。読んでいくと、まさに熱帯雨林のジャングルを歩むように知識のシャワーに見舞われることになるでしょう。しかもそのあちこちに小谷野氏の主張が鑲められていて、万人に受け入れられる歴史などないこと、そしてそれを乗り越えるには感情ではなく時間を隔てた理性的な判断が最も有効であることを、さりげなく見せつけてくれます。

教養主義は減びた…と言われて久しいのですが、でも楽しい人生を目指すだけではなく、時には少し背伸びして「教養」を身に付ける努力をする…そして我が身を磨き、格好を付けることも必要なのではないかと、私は思うのです。